萩乃うら葉

十九

詞花名寄之里

57X
27
60

（源氏卅九才の三月より十月まての事）（[illegible]夕ニ）

御いそぎのほどにも宰相の中将はながめがちにて
ほれ〴〵しき心ちするをかつはあやしく我なが
ら心ながらしうねきぞかしあながちにかう思ふことな
らば関守のうちもねぬべきけしきに思ひ
よはり給ふなるをきゝながら同じくは人わろ
からぬさまに見はてむと念ずるもくるしく
思ひみだれ給ふ女君（雲居雁）も大臣（ね）のかすめ給ひし（中務宮ノ事）事の
すぢをもしさもあらば何のなごりかはと
なげかしうてあやしく（た）そむき〳〵にさすがなる
御もろ恋（れん）なりおとゞもさこそ心づよがり給ひし
かどたけからぬに思しわづらひてかの宮（中務宮）も

慶應義塾図書館
[illegible]

かうはさらさらこそ侍るは、文字あしくあさましきひ
くづしかんほど、人のとがもかゝしを、ひがれなる
ざ御りも人ひともれありなんのびしゝうく
ちさゝとやまじらん、志のぶとすれどうちつくの
よ、おやまりも世はもりまうるべし、じらくまざら
りて、花まりけめべきなありしゝ言しあるりぬ。へ
つれなくてうしこらけぬれ中なれば、ゆかりなく
のひらんもいうどとえしもどうまてこよく
ちゝまてあさんも、ひとれちゝんとらせさあり
いなるつゝでして、えはのあらすべきあるど、おば
する。三月廿日、御侍の御の御侍とやのれ忌日なく。

極楽はまうでまへり、きこえさせられひとさせれいは
侍ひおしもの侍るく、上達部などもあまたゝ京つどひ
あへるに、宰相の中将、おさくけるひさとせずらそ侍
しくそうちあるじ、かうの御わうじころさ侍りは
ほびりて、よりおつあそびて、させ人の首極なる。
このおとゞをべつしとの忠実給ひしまゐり、見え
すらも心づかひきられて、いとゝありうりいとし
まてもつめてあれし給ひせ、おとゞもつわかりいめ
らぬめ給ふ、こず經あるどい、六条院よりもとさやぬへ見。
宰相の君いまして、あるけをとりもちておはしまし
ひとあまうつりまうり給ふ。多くけて、これりん人ア給

ほどなく花はこほれちりこほれ露さへくだきまさるにおほく
せうしかくし出てまかめしうちそかけさきみすめ
はや峯おもおもちれなかる夕のなしきまかはうち
あかりておまけなりし人ゝのさりぐちおそきなまめ
かりてねのへりごゝろとらさいめさすりし給ふしくや
きけん袖をひきしまそておぼつかなくとくこよなくき
こうしなくまへるなふのこのりの心にもさうる
おはさはつきとゆうしあそしさやのこりすくなくなり
ゆくすゑのよよなかひすそのえるもうしとさとも
べくなくのうへまんかうちうしこまりてはさうし
れどもむけもみえきこてきすべきさ露まいらけ

給ひなくことに御なしげにゆめしなさきれぬしささ
はかりつくなさきこて給ふころあはれくしさ
あまうなるかゝれちりぐにきそひ入りのぬ宮
いろそて何なしすゑしさずこ給ひつくしんなどによ
ともまさる心なるけうあれあくりなれべうなさき
くなれどもうきまりてとやうやく扨まひ
あし給ふこゝろの事代のなひの志うしゝやうれ
おもかげもおなじなくきてもうつしなるをさつい
でのわざとはなくさすずまつさくしうんね
おほすまゝ空月のつゝちからおなまへの夜の気いと
おもしろうききこぼれてこれつるの文なすずこと

りこすぐさん〳〵おしこころりみすゝてりお
そびをぞしのそ蓍山将のいとゞ名をもられつゝ
柏 孰中ねしてれもうそこあり一日の菜のつけ
対面おゝずおぼし侍しなされいとゞ母あつぶさちから
詞なんやとありけれ わゝゝ上
ハル らず宿の家の兄こゝさそれはしづ
うね是のあはずりとげ地はいと思もえろさ夜
めへりがおちつけのへるもそろときめさをし
しこまりさて詞
夕 おすくは知りやまどりんかちの姿
ごさのめどくしへつと実そて詞くちおし

ぞらしはなれぞりあすとしのへよとうそて詞
ともまこそとのの内へば ワつらしきすいたんも
いおまそえし詞 柏 おとゞのおまへよそうくなん
よそゆしんぞさせ詞 ホ詞 ぢつやうあそ物しのへ
まやあらん さもすゝき氏し詞ゑどこそいすざ
ゆうゝくのけうろりしそこもとけめとの詞
ゐ心をごうこはあうねくげありざし も侍しじ
女いのかへのみちづれありも面白く嘆て侍あうを
こげるう〳〵ろぼひあれば およびもんあどうや侍ん
とや詞 ワざくつひされゝりけうせぞやうもの
志め人とくゆるし詞いゐしんとよさまへるしく

くるしからず。おもしろくそのあまりにこそこゝろひかるれ。
非参議（ひさんぎ）の程よりなまめかしきさまかへるにありかたい
ものにひきつくろひんやとそかたかれなりの心ことに
あらはえ書しめけれども心してれともまもる
をそれ給ひかれ方までこゝろづかひいみじく
けはひしてそれもすぎ心やましき程ども
ありてかへりおほぢの君たち中将をはじめて
七八人ばかりつれてむかへいづれともなく
おかしきかたちどもあれどおとゞをひとつすぐれて
おもやうきよらなる袍にかうかうしげづき
なつかしげなり。御かくしかけひきつくろひさまなど

し給ひけるはいまさらかくあるまじ。けしうからずあはれ
なる。御姉のかた女房などは。のぞ
きてこの人いとかうまへわびあさき人なり。
なかいらぬいとをかしき。御しもやおほやうにめけ
いでおはすけうらうらいちいと御かたもまたなき
御様なとそあはれなれいとやくさらになる御
めしうあはれびつまてこゝろまことしく。世中に
みえて心ちぞ給。御ほやけが御様もすゝしくあ
れて。おほかれなるありしものがたりそのあはれ
ぞそのきよらもまさりこゝろもちゐおかしくすゝく
あるまじき人とせまほしく思ひなどのみそ。

ひきつくろひてぞおもむし源。あれはあやかり
むべくしきれは地蔵にすゑしきりてきれる
けうはうり源ぬ。其の業のかれとなくられひらけ
料のるくるはめおざりぬいたきざるうじうく
うちすてくちりめりがしめしう御ゆるある
はひごの業のひどりうちをられて夜はさらさりうる
はどあん。おやしくうろはてあそれはおほく
もべる。いろもちる。あつしきゆりすると志所
べしらそうちけほとまゆるかしきまゐて自ひ
きさげあり。月いさしいでぬれど。業の丈さぐるはも
きわほじくあうとはてあそぶいくうあそはなるとて

おほくさまりれあそび源。あとくはほどあらく
そしきひそしめてきぐりがそしくきぬ息り
源そ。さうくろしてのくすゑひあやめり。家を
すゑの世にはおまうまでおめのゑるのゆうそくに
地し源めうをよるひうりめの人。地まひすて源
あんつくりけり。役者はも家礼といふくやあろ
べくや。あるよりのそし人もよく覚しきまんと
もひめつるをいつう心あるやもし源とうしきろうも
べくるんあるくのめて。ゑひあきはやおりしき行は
急色げなき源。つくてうむりしそせの人料うれうきも
ともには。身をまつき夜はもさまそせきうへ志り

ゆふせいかはゆんしあふまじきよるはなくべらん。
まちかねたるこころのうちこそかりなること。
うしこまかりて紹れときくさしかさて御乃
うち紫のとうちぜんじのかくるる気色を治りて
乱中将蛍の色こくてあかさあかずさをおりて
すらうとのれ蓋にくすふきりておてあかむよ。おとづ
むしき紀にかかいけん哉の蛍まいらせ
すきてられたれども寧ねさかづきを持ちあそぶ。
たしさぞかりもつしなりのかへるさ夜ひとよしあり
いくへか霧けさ香をすずしくて蛍の
ひまぞくありにおかん

歌中ねまゐへば
うきやあれ袖はまくへる萩の葉末るひと
しやとも末さらんつきくはられ打むすぶ身
されど思ひのはるされりもろくしらくて
られしらまきしるて七日の夕月夜けは
はるかに池のほとりのどるはまするつれりげ
まぶはのあるかまずるもものさらしあさるる
あるはいとしいるかしかげずこころされかる松の
まださきほどまいわかぬようくれるの葉のなかよの
つなちずむもしるし術の弁のかねをしるく
あるしくそおしかさとうくふ。をしらぢいとけや

けりもつらりまつらばれと打られめるてさしへま
けりこの家のさらちくえへあへ家はれとるいとく
おもしろし。おもしろきはどうまえいりぞむしまされ
あそびて袖さひのきずあまりぬめりやうく
夜ふけゆく程る。いるうすあるやきとそしてとくずり
心ちいとさへぞらて。ものでんきもほどく志く
ふえて待らめべられ。夜ね雨ゆづり給てんやと。中将ま
ちれへ給。おもくに。給夜やれやすき雨まくめよ。おこそ
いたくあひすこそて。むしいあれば。まり入ぬとひ
あそくいりあぬ。中将葉のかけの挑ねよ。いりこそや
くるしきまるへまそ待やといへば。松まちざれりい

あづまる蛍は、ゆくへやしらぬ絵、中ねいろくろ乃
ちらは、ねるのわざやとらす雨あれど、人ざ夜の出ふ
さ夜こめてふきまがうもありつてあんとぶろげ
わろうくあれば、うきろやすくふちびさうおとこ
恋は、義うとおぼし絵はも、げ男いとくもげうし
くぎて堂しのひ、夕んし、女はいとまづしとさひ
ちうそまれし絵もねびまされつれ宿絵、いとく
あつぬ東あすめやすし、世のさ恋しよもありぬべ
うつ男をどろもてこそうまでもおぼし
ゆうさうめれ、恋をとり絵はぬもさ夜うとあすつぎ
されとうしく実絵、がねのみすきいづしつあ

ぶきのともむさいろくとざめ絵つや、いろさぬし
わくがもぐちのとそ、さしいろへまほしうさ
つれとのあんが、女はいとさくしとおぼして
わきさ名をいひあるじけり河ぐちもいうぐ
ましし関のあしぐさおさまりしとの絵さ夜つと
ふあさうずうしうちりしひて
夕　おちまけりちぎふの関とりぞうりのあさきま
のこいおふをざうあん、年月の河きりもいときう
あくあやうしこさま、地おぼしすてゐひまさくちて、
ふらしげるまでるしておくろまきえくずほあり。
ひとぐきてしぶくふをおとくきそうがほあまる

あさいれどもかすめ給へされどおもしろくもてなしぞい
で給へりけれのあさがほにあはれなり。
此文いたう紙志のびやかにつゝ夜のころづゝひみえて
あつかひ中ゝそのいえ男し給ふぬを抱つゝひさゞなるさ
ごゞちつきしろかるおとゞはりて給ぞいと
はりなるや。つきさせざりつれどしきり中くい
とぶ志つゝ君のほどをそふへぬうつろまる
まし心べきを
とむかは志のひかにほりてもなさをふ
おもひの袖のこぼれぞおもひとちれば給ある折
あさひくをいつくもろさきあはれなるけつられなど

の給ふもむりしのあづかりなし。此返しいといそさ
ぐるげなれば。こゞなしやさてさも思ほしながらぬ
べきさしられば。けうりぬれ彼のかくさなべてなしぬ
さ夜はあへり中将おかしさ夜はあそてなし給。
つねまひのさそくしてかろ人あつさらしれけり
ひそかに。おもちちなど人しくやうかめり
おとのぞうなる人のひつまりくおぼしつゝ給
るなり。六条のわたりもくさうしみてぞり
宰相つねかうもひとりそひて参りあへればうち
まゐりおてけさいうなるわくかずしまれしりや
さしき人も女のすぢはこぶちうしあるを。

人ハかくかづくひとかゝれきてすくなれなる
ちんずうし人はめけるりけるれうろとおぼしけ家。
わとうのれとまきてのあまりすくえてちかづきちかく
かげわれ給ぬるを。世人ものひのかろうしわしんや。
きうとてもけふ方なけりなうかは心をごりして。
まさぐ志つさ心だら人ちなどもし給ふ。ぶうそ
わうるは切伊をさるる心をきてゝにまわれど。志ろの
心だら人切くしうずりをあらて。人えしうくき所
つきのへる人あらちだ。れいの多しへまうしなふ。
こしうらあひのやすされあきひと切伊さるれ子
ともうしずずるしさのつまざらりとらし給ふ伊ら

伊りそてハ切るまで伯なきうけしらりらみとえ
ゆうれを。切まん人よてハ。き殿ぐあれめでいと給
へりおうらがいうすされちるあし志うされぞのうる
かきてるが。あんけざやるまつやくいとすきさうるを
あけて彼つさをずあてよち殿めしうおりしまうす。
寧ね殿ハすあうし家かうされちをしまてずぞめ紙
こづうくまてあめるきろうきあやのおまりしこう紙
さめへる。こしさしめなそえんよこゑらえん紅わて
まちそれ尊師とそくあり見れど。白られて清
うくぐふりうしきべいうし。ふきちなど。切伊や守
ざ殿はうるしずゝろぐよしの人へる。清まん家

さほうせうけして、遊びなどもありつかひてなる
あまうりしされ前するとも、おやしう心げかひ
きこえておもしろきなり。宰相はこゝろちく。
いよいよけうじひきつれて出給ひ、けざやかに
うちとけずながら給ひけれど、ひとしくめしよせらるも
ありたり。年比の川ならひぞへて、さやうなる
れなるひとあればつゞきもんやも、おもしき
おとゞもいとどきこえさせ給ふとうけてさ持る
おぼしてはいひしつゝつゞき男絵まけぬるを
のはおし絵をもつきまつゝ猶つまじうぞ、また
やうなる心にくきの年比よと心なくてわらひもせ

がしかへるなど、せおりいうきしゆかす。女御さん
有様なとよりも、家やうまつておとしまほし
きれば、吹方ふしかへ人などちかどは心よりまさるひのいふか
おれど、おまへのみしさうとわらん。おぼちの小宰
なども、いかなるまでうけしとなるさし給ひても、
くて六条院のいそさは、女より日のほどちなりぞり
さいのうへ、あれよまうでのふとてれいのれいふか
さいはあるひこそてあへど、あるくらしもひきつゞ
きて心やましきを思してなれもくとられも
あそびとくきさほどよまも、おほずれ東大むろまき
まそれなんなども、らくらく人々ず枕らも

わかず車さうぞくろしもけはひことなり。まつりの
日のあかつきにまうでゝ、かへさは物御らんずべき御さじき
へおはします。御かた〴〵の女ばう
をの〳〵車ひきつゞきて御まへところしめ
たるほどいかめしう、かれはそれとめよりおどろ
おどろしき御いきほひなり。おとゞは中宮の御
母みやすどころの車おしさげられたまへりしをりの
ことおぼし出でて、時による心おごりして、さやう
なることなんなさけなきことなりける。こよなく思ひ
けちたりし人も、なげきおふやうにてなくなりに
き、そのほどはのたまひけちて、のこりとまれる人の中将は

かくたゞ人にてわづかになりのぼるめり。宮はならびなき
すぢにておはするも、思へばいとこそあはれ
なれ。すべていとさだめなき世なればこそ、何事も
思ふさまにて、いけるかぎりの世をすぐさまほし
けれど、のこり給はん末の世などの、たとしへなき
おとろへなどをさへ、思ひはゞかられ
るればと、うちかたらひ給ひて、上達部なども御さじきにまゐりつどひ
給へれば、そなたに出で給ひぬ。近衛づかさの使は頭中将
なりけり。かの大殿にて出でたつ所よりぞ人々はまゐり
給うける。藤典侍も使なりけり。おぼえ
ことにて、内裏春宮よりはじめたてまつりて、六条院などより

二十三

よりわれらかしひどらと雨もいさきやぞれ。たらのよりを
やとめでうし。宰相の中将。りやうちの雨ふりさえ
ともしひのくちうちとけず おもられをみはしゑ
中るれども。クノやんごとなきるまさへずまり
ゑぬかせ。うぢるしずうらふひるら
ちからや。気のかぶしよりかく おぼめ
くまでもなりにけられ。おきましとあるを。
おりすぐしまもぬぞらりけを。いらぶおもひけん
つと抱きはぐしく車まの御ぞなれど
ゑしても何かぶしる草のゑはなうを
ねらし人はやもうしんぶるぞなして心もしとり。

もしれ々れども、ねすてきいしんとおぼもとおぼしこの
御傍ろきてせちなれずとひまぶされのんべきうくてはあ
まりりまいわのるいそひめべくきせつるまあるがく
しくもえそひさかしひ給もしいうわけつぞしま
ゑれうしろくやさんましとおぼもと。紫心うへと
つねまおうべきことのいくへぐらうそもぞいゑを。
ゑ人もとゑしとかひあるけりらしん。この此ころ
まも今はやうく打つおぼつく気まおぼしもる
らん。うらぐ心せられましんも。あいねうしとおもひ
あらめて。このおりまで入ながらあんまいりとあえぬ
ならぬどもうきわめてきなさかしへなてまいる

わりなきのみこそ思はれけれ。かれらかちも、こそ
よそめにはとの心はへかうかすあふさき。うけしも
えのかくしもさかくハさしんほど、いろやすかる
へやとかたくしの人ハ、ひとく思ほしよふかれと
見てさるんとおもゐはもうくひの給へれども。
宮の いはくうれしとおもかくよきひ給ふ心ちして
人のかりかくあるもの、ともやんごとなきされ有様こ
ともかうくいさかそころ。おまえおりらん。おもしこのれ
あひさき、こなしらんの心かくつけつ、いまひとつひ
とよう世もやといのちをも人さうねかうしてねん
しけかなきハかうして侍ともかるし。その程ハ

宮 人をひて車のつかれて車ままちくかうちうち
あるしらと人ハわろうへ、こそ、けさめは思ひくく
うす、ぐくくこさき侍給めのさすまて、けがかく
あかしかうを行いかしかう心かうしう思ふれま
りのさしさ、人のめおびらくでらしのくしとはを
しとおぼしつめでくをのづしよれるのさ海
まぞおしぬやかぎりまあくしづさすへなりあそ、
宮 そ人いまくとをおされまう行くしや思ひこそ
給まつけても、人まゆかうまうかまくとりうる
ともおしおしかばと思はで、らくども。常ねの袖も
さぐこのことひとつねまるん。おろぬとしるまるん

切りけり。三日すぐしてぞ人はあつまりてさき給
ふたりありて京の給ひ夜の風対面あり。くわしとあひ
給ひけるもあらん。年月の程ども志しれ侍れども。
うとくなりたるへぞてい絶つましうやさしうらめしう
のあて。御絵なども給ふてもうちとけぬるもしめ
なめり。あはれなるもちひつけひかれはむへくなを
さとめ給ふうち給。文のとけるうつきてあはれ
はしさせのとめてうとさて。そこらの中よも
そくれられたるさらしうそておしひあまさき給ま
さしまり給ひけるもつとてとつくとあひ志しうさま。
うきまでしらなし。ひをゆかる給ひてかなりやいと

思ひわびらで給ひしさのつとらるさまのほしく
れて車あるにゆかされあて。女院の御あはりさ給へり
しあられぬをこひむしかりしさすがなる男の程ぐ
ありつとりけりけるひぬあ此やうあすれ有さ給ひ。
年のうちしてさまるも。涙のこともまさしぬる。
川とつ袖もぞらしぶりけり。年ばよろけるけるさ
ちづさ給くうさ男と思はひらくけるいのちも
のべまほしうられぐたつさま川けてきこえま
すまよしの御神もきゐるらずむしゝらぶらずさ給
まうしづきさて。こゝろなきぬぐめことのく。
あさくなき人のうらみしさみすればよるの

ことおぼしよりもはじめ。なべてならしぬれおりさ海
くるしかるを、家もうきされ心からまかうくるしさは
ものもおぼえずうちふしてまいるよしのおどろくの人
なにはこの世のうてさみしひのみどころのすゝ
いひあはしなどすれど、それはけかるくもおぼえず
いまめかしくなるひならぬをよばふこともいなば
こゝろよくうしあはれけるひをもらうさゝるまゝ
つけてもおぼしまほしくまてあらしさえかへれば
我ご人なともめづらしきいとゞ家まてぞうるくま
さらに人とも心をかけるは女房のやうい有さ海
さ人つらじくらうのくなりしあまりくも京さかへさ

ありかしまはまいり給ひぬるしひおもはほしく
うちとけわりまいりとてきしすぎ地なれど、おかむ
つかうしかるべきまでもあしらる。露なくおや三うつ
おし海ほしき人の此ありさ海くるかるべくなりたま
さぶもなかくらはるのこおぼさるれせのくしあるゝ
まさおぼしつゝれまいりのことひあるさ海すさまじき
あしかてさるしかれど、世ならうきさるやうまて
さからしうつゝ峯ねの花もおもひあくめやすき
さ海よそづまり給ぬれば此心おもちぬなくてある、
今はいもとけなんとおぼしなる。女はいのちこれ
ありさ海のかすてもこゝよも、中ずなおりしませぬ

まろうちゝぬれこうつうとちりこの川かうくてりも、
せうはきうしれうおやざ候ふは。まうせこさうしのかへ
されば、ぶりともしとおばしゆづりかり。家の川かくの
時ぐまさちるやぶ給まじきも。寧ねの親志のかへたく。
られぶりぐまうきろめくりし寺おはしあうゆく
おけんぶしよそちるるりのかへかれども、川世のうと
みを給やけうりちらめ候りて。おはさまう世志
いそぶさるりぞの枯おゞ天皇まあるずしふかれ位え
かそ。ぶふくそくまづつさうかりちゞされそ給。
こらぶしも世の川心よりちそぬとおけれど、ちは
めづしらつ音の時とおしそて。究目ともあど

おりさ候ふよのふそしうありそひゝすへハ、物は
まつりのへぶきこともうへ。ぶまぞ。そつハおばし
けりうてもれわずこうぐハおばしして、世中を
そうぢうりて。位をゆつり承し給のぬこゝとある。従々の
川ねるけさぶき春けう。内大臣おゞりのそて。寧ね中ね中
納言まありのぬれよろこびよ輿給。ひゞうそいとゞ
まさりのへふ候ふうちよりちらじめそ。おうぬこと
あさうれをおつぶの母ともあるゝ人まなくそれ
まじゝうやづゝへうりちゝとおばしあうり。老木
多いふのめれと、六位すくさとつがやさうしうねゆ
ふしかのつおりくまおはし出されハ、よくのいと

おもしろくてうちひとりごちたまひて
あさがほはくずのはゐをかけてめでたきの
あとうけたるや。かくありし折りのひとことこそ
わすられねといふまほひやりはへるかへそのへの人々。
えびしゝいとおもしろくつかうまつりけるかな
かく葉かけありてかくかぞのなれなれば、おもしろき
夜もなかなかもみぢばかりはこゝろなくをかへの人々
けりはいとかゝれそゝりしかゝれはつとに、はひま
さりて、いづれすまゐもところせくれば、三条殿へ
わたりぬるまへにおれわぐらをいとめでたくすり
かゝりて、やのおりしもみえて方をおしてあ志り
らひて、かゝる所。むかしおぼえて、長よらうちとけ
れすまゐあり。前栽どもなど、ちいさき木どもあり
しも、いとをかしげなる。ひとむら薄もところは
まさりて見えけり。かくろへを旅やり水のを
草まくらあはれにて、いと心ゆきたるかほしたり。
おかしきゆふ暮の程を、いと南おもてにおかし
ましかりし世のならひおもひいださる。ゆかしきなり。
あはれとも思はるゝ人の心ならひことさまならず。
女どもいとおぼしいづ。かゝる人どものまうでちかづ
ざうしにまゐりて、ひけるほどに、まうのぼりあ
まりて、いとうれしきかほあへり。おとゞこゝに

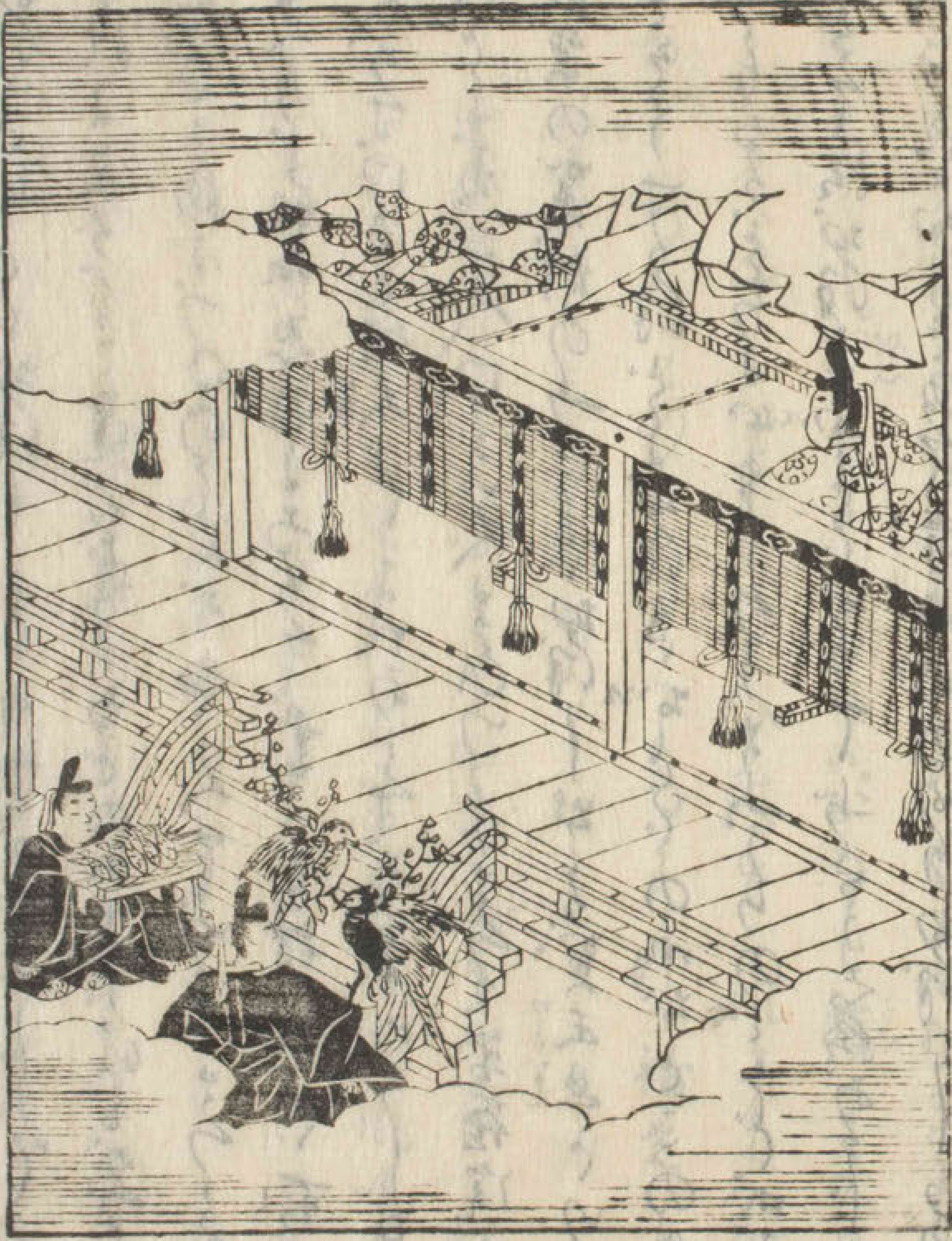
あれはてゝ岩ほあらはれし人のゆく末ハ
ふりや庭どれましるか。女ごゝろ
あまさ人のかげつゝまへずつれなくてうらみな
やれかいさしねの水。おぼののふほどに。おもしく
うちふりまさで紛けるを。紅葉の色にあらそ
まされて。口ぐちの人々し

むかしかしまへしはあまさ夜ありも。六
さ行さらかくちかく。おくりくいとかくなし
くすまるのくるさ夜。蛍やまろどとふ給はつけても。
いと地あまれはかげさう。中納言もとしこととは
わすらしあまえていとどをかしまうてまかし給。
おしかはしくうめくしげなかれおもてひあるれど。
女はまろうろうちのさらひもあさぢかあるしんと
しあへりかにこへとさしまあくこうしはおり子。
あるへどもかまへは前えて。神さびさうくぐも
こさしいづおりつられてあるひどもれちりうるを。
めくしつけてうちも給れ給。一羽水のこころ

まうのき給しられど。おとされいくいつしてさの給
そのさのおのまいむべもうちぬらんうへし
こ松もうけかひまうり。かさこそゑみの宰相のめし
どつらりし心もいじられねば。おとうりかりは
いつれをもうけとぞさのむかさ紫よりねざし
ましきう松のすゑぐおいへぜもやうのすちは
ぜそおつめうるぞ。中納言いかうしとかけさ。女君を
おつまくかまてあるらそ。くまし給さ給。神宮相の
以後あまりのはじは。六条院はも葉あり。紅葉所
さうりまでけうおうへさらびのこ色こうるうは。蛍薩
院はもれきうそこありて。院さへいうおりします

べかれば世は見づしくわりかくこそこともすて。
まの人もころをおごろか手おうじの院からも。れ心
をかくしめもおやなるかにゆるかまうけをもちく仕給。
この時よりかずありて。まつむまむの殿は。左右の
つかさの少将ひさちうしへて。左右のを滝かちかひ
ころさゆうかるのきちにおやめられどもかうへ
かりひつじろぶるほどよ。これこのさん銭まうけを
おかしますこちの稲そりそしつる銭はいうし。之給
これおくはかるべしと家はいさんしやうをひさしか
かしうこれさをぬへりひかしの池は舟どもうけて。
ころしばころのうちひの都。朱雀院の鶴かへたをかし

ありくて鶴をかきらきをうすへりちいささかれども
ひらげされかんとはあけれどずずささせ給
うちのけうぞうりよあん山のまみぢはいけうる
をとられどもよしの切手の人は心ことなりを中の
らうのべをくかし中門をひしくそてきらのへべ
あくてかんをさせの御座かうけよそひてお
あじのれ座いろくのなどあんしあてあをさを
治頼どめでうくこしされどもこうどいれうぞりあり
やくしこをけりてこもなら給こぬことを
あんおほしけるか池のうへ左のおね天ら殿人おぼ
さうふひの御野をよりつかまいれうざりひと



十三

づひきおのまけをあげて。きんやのひんがしより。
御まへにつゞきしのひさしにまいりて。ひざを
つきてそうしき

おほきおとゞおほまうしのそてなみうじして
あれはまうこに道どもあるどのれあうけものゝ
ちきさ夜につゞのとしげなきへてつらうたるを
みくらゐはれ思ひはあらて菅かろ行まづ前の
へめすけざよれ大ぐまいあしずなすまめしき
ほどは夜に人つゝえべまひつらまうか朱雀院の
紅葉の賀御のつゝしかほしおる賀王恩とも
きそうすうほどまかほきおとゞのれおとこの十
ぢかりあうおもはおもしろうまふうちのきかどれぞ
ぬぎそ給かほさおしらかりてふくうちき給あるしの
流さくかしきめて青海波のかりかほし〳〵

冬まゐるあはきの菊もかうくに袖行かへし
秋そらへかしかくぞそのかりふおもむ舞まへち
なきび笑給しなし見れも人の及もなれさまへ家
見あつしおうあそてのさらくうまうらける極党し
よりか時世かりちりいかゞなり
紫の雲にまがへるきくの花にごりなき世の
ほしかとぞみる時にそまかれとをさて給夕風吹たへ
くれみちのおもむろきうすきうらしさをしつき
けふの人々しまづ後の雨にくもりかりし
らうへのやむごとなき家のそだちなどそおほきさ
おうきさうしつゞきこにてもうたえび殿あまとつるのごとく。

紅のいろひとつはづかり竜胆とこそてうつくしうさ
桃どきをほのかに薄紅紅葉のかげ見ゆるへるし
いろほど日のくもりもいとおしげなりがく霧などに
おぼろくさくはをすぐ人のれあそびなどまうりて
かむのうさのれようじも女子桃のけうぢら立する
ほどよれ前まうれれてら代まわりぶるの法し
のとうぬの忽も菩薩院はいとめでたしく哀る
こそしめす
然あまへて時毎かうめる皇人もうるまみぢの
おぼえこともつくめしづるぞ見しるや。こぞ
られ同〇の紅葉とやうるわしくのあしよ

ひけつ夜のうしさとけ明しもしを給はうるち
つまづくねびとのほりうてらびひとりまれとこ
えさせ給を中納言のさふらひ給がごとくなつかぬ
こそめでたし。あれ。あてよめでたさけらひや
御ゆひあしまそとりまさらん。おぼやうりうか
いしさこそいはそひそさん見ふえつうりまうり
給いし御もしうし。さうがし殊ごん人こそしうり
さぶらふ中納言の少将のうえもぐれらり。我らる
べきことこそしうれあしいひあやめり